

研究・調査報告書

報告書番号	担当
278	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学
題名 (原題/訳) The fraction of cancer attributable to lifestyle and environmental factors in the UK in 2010. 2010年に英国で発生した癌の生活習慣と環境に関わる要因分析	
執筆者 Parkin DM, Boyd L, Walker LC.	
掲載誌 Br J Cancer. 2011 Dec 6;105 Suppl 2:S77-81.	
キーワード リスク因子、PAF、癌、英国、2010年	
要旨 目的： 2010年に英国で発生した癌は、14の生活習慣と環境リスク因子に対する曝露にどの程度よるものかについて推計した。 方法： 18種類の癌について、1つもしくは全てのリスク因子に対してそれぞれ検討を行い、寄与する割合を示した。検討したリスク因子は、喫煙、飲酒、食事の4要素(肉の摂取、野菜果物の摂取、食物繊維の摂取、食塩摂取)、肥満、運動不足、職業、感染、放射線被曝(電離、太陽光線)、ホルモンの使用、生殖暦(母乳による育児)であった。 結果： 2010年の英国において、14の要因の曝露は全134,000症例の中で42.7%(男性で45.3%、女性で40.1%)に寄与した。喫煙が英国では癌発生に最も重要なリスク因子であり、2010年では60,000症例(19.4%の新たな癌発症)に寄与した。その他の要因への曝露については性別によって異なった。男性では野菜果物の摂取不足(6.1%)、職業上の曝露(4.9%)、アルコール消費(4.6%)が、女性では肥満(6.9%：乳がんへの効果のため)、感染症(3.7%)であった。 結論： PAFは癌の異なる発生要因に対する影響について量的評価ができ、それゆえ癌の管理戦略の優先順位をつける上で有用である。しかしながら、予防介入の影響を定量化することには、リスク因子の実現可能で達成可能な人口分布の特性、ならびに曝露-アウトカム間の潜在期間と曝露レベルの変化によるPAFの変化など、複雑な要因がからんでいる。	